



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

感動のシーン…仲間を信じて、仲間とともに

平昌オリンピックが閉幕した。テレビや新聞、ネットなどから、日々刻々と伝えられるアスリートたちの勇姿に、私たちは声援を送り、感動をいただいた。アスリートにとっては、4年に一度の格別の舞台である。アスリート一人ひとりへのインタビューはもちろん、監督やコーチ、共に戦ったチームメイトやライバル、さらに親や恩師、知人など、これまでずっと寄り添い、支え続けてきた方々からのことばから、並々ならぬ思いの深さ、ことの大きさが伝わってくる。

とりわけ、団体パシュートの一糸乱れぬ隊列と、滑らかな先頭交代は、実に鮮やかだった。個々の力では格段上のオランダを、日本はチームワークで凌駕した。準決勝、決勝と、立て続けに出場する高木姉妹の体力を温存させるために、菊池選手は壁になって滑ること、ただそれだけを念じてレースに挑んだという。

「そだねージャパン」と、いつのまにか名付けられたカーリング女子も、ずっと仲間とともに過ごし、数多くの試合を経る中で、あうんの呼吸を身につけていったという。悲願のメダルを手に入れることができたのは、一つの目標に向かって互いを支えあい、仲間を信じてプレイができるようになったからだろう。

仲間を大切にチームワークで乗り切ろうと、子どもたちに声をかけ、励ますことがある。ひょっとすると、こうした励ましや声かけは、やがて「ここぞ」というときに大きな働きをする原動力につながっていくのではないか、いやいや、つながって行ってほしい…などと、それこそ夢のようなことを思い巡らしながらの観戦だった。

オリンピックに続いてパラリンピックが開かれる。きっとそこからも、子どもたちへ伝えたい、感動のシーンが送り届けられると期待している。心して受けとめたい。